

仕事をすべく、人知れずマンションを出ていったフェイスマンは、今（昼）、小洒落たレストランの予約席で待ちぼうけを食わされていた。懐から折り畳んだ書類を取り出し、読み返す。もちろん、黙読。

依頼主は、二〇二号室のドゥーニ・デモナーレ君。彼の依頼の一つは、「この冬流行のジュエリーを半額以下で手に入れろ」ということだったのだが、もう一つ依頼があったのである。それは、「交際の女性に、やんわりと交際のお断りをしてほしい」ということだった。こんな依頼をこなせるのは、Aチームにはフェイスマン以外にいないだろう。そうフェイスマンは信じていた。だから、他の誰にも言わずに、依頼を公にもせずに、隠し通していたのである。

ドゥーニ君はご丁寧にも、その彼女の写真を同封していた。留学中の日本女性、その名をハナコ・ヤマダと言う。長いストレートな黒髪に、凹凸の乏しい顔面。しかし、その造形は悪くはなく、上品さが漂っている。スタイルもよさそうだ。

さらにドゥーニ君は、事の次第を書きたためてくれた。彼には、ハナコさんの他に、本命の彼女がいる。そして、依頼書を提出した直後、彼はその彼女と共に海外旅行に出て、帰国は年明けになると言う。ハナコさんとは行きつけのカフェで知り合い、単なる友達のもりでいたのだが、まああれこれあって、プロポーズを期待される仲になってしまったらしい。だが、彼としてはハナコさんと結婚する気などさらさらない。彼の推測によると、ハナコさんは彼と結婚してグリーンカード（合衆国永住権）を手に入れたのではないか、ということだ。ハナコさんとのデートは、あることないこと理由をつけて断ってきたドゥーニ君だったのだが、今日のランチと一緒に摂る約束だけは、わざと断らなかつた、とのこと。当初の予定ではジェイソンにきっぱりと（だが、やんわりと）お断りを告げてもらうつもりで。

今回の海外旅行の資金を得るために、ドゥーニ君はバイトを増やしていた。彼がバイトでいつも以上に忙しくしていたことは、ハナコさんも知っている。その末に、断り続けていたデートを承諾したということは、ハナコさんとしては「やっとプロポーズしてくれるのね。バイ

トで貯めたお金でエンゲージリングを買って」と解釈するに違いない。そういう人なんだそうだが、ハナコさんという人は。

『ぜひとも、穏やかに、僕が悪いのだと思われないうちに、僕の印象を貶めないように、永遠のお断りをして下さい。成功を祈ります。』

確かに、依頼書や手紙の文面からすれば、ドゥーニ君は陽気で気さくな、しかし細やかな気遣いのできる優しい好青年だと言えよう。だが、二股はいけない。そして、こんな事態を他人任せにするのもいけない。そうフェイスマンは思った。フェイスマンのくせに。自分のことは棚に上げて。

足を組み替えて、ドアの方に目をやり、フェイスマンはハナコさんが現れるのを待った。既に約束の時刻を二十分すぎているのだけれども。

フェイスマンがすっかり待ちくたびれて座席でウトウトし始めたその時、レストランのドアがカランと開き、店内に入ってきた一人の女性。途端に、店内にチラホラいた客の全員が一斉に彼女を見た。ウェイターも見た。なぜなら、その人がとても個性的だったから。

その出で立ちと言ったら、日本人ならば十人中八人が「七五三？」と答え、残り二名が「仮装」と答えるであろう真っ赤なキモノ姿。裾模様は鶴と御所車、帯は金糸の大振袖姿である。店のそこから、「オー、ゲイシヤ・ガール」、「ファンタスティック」という溜息交じりの声が聞こえる。

彼女は、顔の前に大きく垂れ下がった簪の飾りの隙間から店内を睥睨し、目指す相手がいないことを知ると、ウェイターに向かって「ヘイ！」と声をかけた。

「ドゥーニ・デモナーレって人と待ち合わせをしているんだけど、いないみたいなの。何か伝言を預かっていない？」

「伺っております。どうぞこちらへ。」

若いウェイターは、恭しく彼女をフェイスマンの席へと導くと、居眠り中のフェイスマンの肩にそっと手を置いて覚醒を促した。

「ありがとう。でも、人違いよ。ドゥーニは、もっとハ

ンサムだし。」

そう言うて踵を返す彼女。

「ちょ、ちょっと待って。」

起き抜けの視界に突然飛び込んできた真っ赤な物体に一瞬度肝を抜かれたフェイスマン、縋りつくように彼女の袖を掴んだ。

「ハナコ・ヤマダさんだよ、ね、僕、ドゥーニ君の代理の者なんだけど。」

「まあ、ドゥーニの？」

彼女ハナコ・ヤマダの顔がパッと輝いた。

そうして、彼女はフェイスマンの話を聞くために席に着くのかと思いきや、ウェイターの方に顔を向けた。ウェイターと目が合うや否や、何も言わず視線を椅子の方に落とす。「椅子を引きなさい、そして私を座らせなさい」ということだ。ウェイターが慌てて椅子を引くと、彼女はそこに浅く腰かけた。その背筋の伸び具合と言ったら！警戒中のプリーリードッグも裸足で逃げ出さなばかりだ。

『……もしや、彼女、いいところのお嬢様？』

フェイスマンの頭の中で、旧式レジスターがチーンと鳴った。が、その瞬間、ハナコがびしゃりと言った。

「ドゥーニはどうしたの？」

明るい笑顔を浮かべているのだろうが、顔面のパーツが小作りなため、どうも表情に乏しい。その上、何となくなんだが、フェイスマンに向ける視線は冷たい。いや、フェイスマンを見ていない、と言った方がいいだろうか。いやいや、フェイスマンを見てはいるんだが、ペッパミルに向けるのと同等な視線でしかなかった。

「ええと、その、彼はですね、そう、旅行に行つて、行かざるを得なくて、それで僕に代理を、と……。」

「旅行。」

「そ、そう、旅行。多分、恐らく、仕事関係のじゃないかと、ははは。」

意味もなく笑ってみる。

「彼からの伝言は？」

「伝言ですか。……えー、いつ戻るかわからないんで、帰ってきたら彼の方から連絡を入れるとか何とか、そん

なことを言っていたようになかったような……。」

ウェイターがメニューを持ってきて、二人はそれぞれにメニューを開いた。

「他には？ 彼から何か預かってるものとかない？ 私に渡してほしいものとか。」

「あー、いや、別に何も。」

ガッ！

「いてっ。」

フェイスマンの額にメニューの上辺がざっくり当たった。

「あんたね、冗談は顔だけにして。」

ハナコ・ヤマダ、容姿と言動にギャップのある、掴みにくい性格の女性であった。一方フェイスマンは、自慢の顔を冗談扱いされ、メニューの向こうで静かに傷ついていた。

それより数時間前、一仕事終えたキムは、コレード家を出るなり、隣のエヴェレット家のドアチャイムを押した。彼女、病院で食中毒患者の群れを捌いた後、社長に大事なおねだりをするという大任を果たし、帰宅して朝食をご馳走になって、「さあ寝るわよ」と寝入ったところをマリアンに叩き起こされ、それからずっとガブリエラの出産で忙しくしていたため、現在かなり不機嫌。

「私よ。開けなさい。」

キムがインターホンに向かってそう言った数分後、ゆつくりとドアが開いた。

「やあ、キム。具合を見に来てくれるとは光栄だね。」

出てきたエヴェレット氏は、「いつつつ」と背に手をやった。

「誰の何の具合？」

案の定、キムはエヴェレット氏が体の不調を訴えていたことなど、さっぱり忘れていた。

「それより、あなた、CM制作できる？」

「ああ、できないこともないが。」

「そう、じゃお願いね。」

「ちょ、ちょっと待ってくれよ、CMって何の？」

「WTPPのに決まってるじゃない。三十秒のをよろしく。できるだけ早く。そうね、数時間以内にできるかし

ら？ 頼んだわよ。」

言うだけ言って、キムはボタンと扉を閉めた。これでやっと寝られる。数時間だけだ。

二十四時間ほど前、マードックとクツワダ氏がキリンについて語り合っていた頃、この狂想曲の発端である人物、マンシヨンの家賃を払う代わりに何でも屋を開業（？）し、挙句の果てに全てを投げ出してNYに渡ったグラフィック・デザイナー、ジェイソン・ヒックス氏は、当然ながら、未だNYにいた。

NYで何をしていたかと言うと、まあ仕事半分、遊び半分くらいな感じで、古びたファッション・ビルの壁面をオレンジとストープの模様塗り込めてみたり（仕事）、白のジャンプスーツに身を包んだ老若男女約百名とセントラル・パークでペンキの塗りたくり合いをしてみたり（芸術活動）、出版関係の女の子たちと夜な夜なクラブをハシゴしてみたり（遊び）と、なかなかにお盛んなご様子。

元々、切羽詰まった用事がある旅ではないのだ。LAのマンシヨンの住民の細々した用事に対応するのが嫌になっちゃったのと、遊び半分で手を出していた複数の女の子の後始末が鬱陶しくなっちゃったのが、旅の動機とさえば動機。

NYでの彼の宿泊先は、セントラル・パークを見下ろす高級マンシヨンの最上階。もちろん彼の持ち物ではない。とある出版社の社長の自宅を、社長が出張に行っている間、限定で借りているのだ。家賃はタダ。その代わり、社長が帰ってくる一月の半ばまでに、壁のペインティングを含む部屋の模様替えをすること。それが、家賃代わりにジェイソンに課せられた使命だった。

そして、クリスマスも間近に迫った本日二十三日、部屋の模様替えには全く手がつけられていない。

そう、ジェイソンは、どこへ行つてもジェイソンなのだ。

「ああ、部屋の模様替え、面倒臭いなあ。」

ジャンパン片手のバスローブ姿で出窓に腰を下ろしながらジェイソンは呟いた。

「期限まで、あと一カ月くらいしかないじゃん。家具全

部出して倉庫に預けるでしょ、それから掃除して、壁を下塗りして、模様描いて乾かして、ウオーターブルーフのコーティングして、それから倉庫に行つて家具の塗り直し。乾くの待つて部屋に戻して……あ、その前に、絨毯とかカーテン買いに行かなきゃ。……面倒臭いなあ、やだもう。助けて、テンピー。はあ。」

と、都合よく自分のキャラに助けを求め、もう一度溜息をつく。

「そう言えば、ロスの家の仕事、テンブルトンがやってくれてるんだよね。連絡がないところを見ると、順調なのかなあ。あいつ結構、器用そうだし、人当たりもいいし、我ながらいい人選だったよなあ。」

と、空を見つめて何やら考える『どうして？』の作者。しばらくの後、急に満面の笑顔となり、イソイソと電話を取り上げ、少し考えてダイヤルを回した。

「ハロー。」

「ああ、マリアン？」

「あら、ジェイソン。今度はどうしたの？」

「いや、家に電話しようと思ったんだけど、自分の電話番号、まだ思い出せなくて。で、あれからどう？ そっちは。」

「相変わらず順調よ。すべてオッケーって感じかしら。」

「テンブルトンたちの仕事の具合は、その後どう？」

「バタバタしててよくわからないけれど、順調じゃないかしら。彼ら、すっごく精力的に働いてるし。」

「そっか。よしよし。」

『それよりも、ねえ、ジェイソン。あなたの方はどうなのよ。仕事が忙しくて、クリスマスには帰ってこれないんでしょ？』

「いや、その予定だったんだけど、ちょっと気が変わってね。クリスマスには、ちょっとだけそっちに戻ろうと思ってるんだ。テンブルトンに頼みたいこともあるし。」

『ステキ。ジェイソンとテンピーの友情は未だ健在なのね？』

「え、テンピーが何だった？」

『いえ、いいのよ、こっちの話。あのね、クリスマスにみんな、ちょっとしたパーティを予定してるの。ジェイソンが戻ってきてくれるなら願ったりだわ。』

「わかった。明日の夕方頃にはそっちに着くようにする。じゃ、みんなよろしく。」

そう言ってジェイソンは電話を切ると、鼻歌交じりで、航空チケットを予約すべく、もう一度電話をかけた。

「さあさ、皆さんを呼んできて下さいな。」

ミセス・ハイデンは、肩で息をしているスタングとヴォルフに言った。

ヴォルフは車を走らせて、町までファムタを買いに行き、戻ってきたから部屋の掃除をしていたのだ。スタングはシーツをすべて洗濯して再度室内に干した後、ヴォルフと共に部屋の掃除。未だそこはかとなく室内がメロン臭いものの、緑色を残しているものは既がない。二人の服も洗濯され、現在彼らはTシャツにジーンズという装い（ヴォルフが急遽買ってきた）。

「皆さんって？」

黒服を脱いで、すっかりただの大男になり下がったスタングが尋ねる。

「このマンションの皆さんですよ。お昼ご飯ができました、と知らせて回るんです。」

優しい微笑みだが、その言葉の端々からは「さっさと行きなさい」といった雰囲気は滲み出ており、これは命令でしかなかった。

「仕方ない、行くぜ。」

ヴォルフが立ち上がり、スタングも渋々と従った。

数分後、ジェイソン宅リビングは再度、食堂となっていた。ナシゴレンを乗せた皿を抱える面々。さすがにガブリエラと新生児はこの場にはいないが、それ以外の全員が集まって、カツカツとナシゴレンを食べている。いや、マードックとフェイスマンもいない。

「モンキーはどうした？ それとフェイスも。まだ寝てるのか？」

ハンニバルがコングに尋ねた。

「俺が知るわきゃねえだろ。ずっとベランダにかかりつきりだったんだぜ。」

「マードックさんなら、うちでシャワー浴びてます。」

話を耳にして、ミラーが口を挟んだ。

「君は？」

見覚えのない顔に、ハンニバルが問う。

「一階のミラーです。マードックさんに行方不明のカメを探してもらっていたんですが……。」

「ああ、そう言や、あの馬鹿め、庭のいろんなところに潜り込んでたな。」

「知るわきゃねえ」と言ったコングも、ちよつとは知っていたようである。

「ええ、それで、戻ってきた時にあまりにも汚かったの、シャワーを浴びるように言ったんです。」

「で、カメはどうなったんでい？ 見つかったのか？」

見つかったのなら、依頼リストに消し線が一つ引ける。いいえ、残念ながら、まだ……。」

と、その時。

「いたぜ！」

玄関のドアを勢いよく開けて駆け込んだのは、噂のマードック。高々と掲げた右手には、小さな小さなカメの甲羅が。

「カメ！」

ナシゴレンの皿をテーブルに置いて、子カメに駆け寄るミラー。マードックは、ミラーの手にその小さなカメを乗せた。

「カメー！」

手足頭を引っ込めていたカメだったが、ミラーの手の中でゆっくりと頭を出した。ここぞと細く「クー」とか鳴いて擦り寄ってくれば、かなりの感動ものなのだが、生憎カメは鳴かないし、飼い主に擦り寄り寄る習性もあまりない。

「ど、どこにいました？」

涙目で、ミラーはマードックに聞いた。因みにマードックったら、パンツ一丁です。パンツ一丁の男がカメを掲げて乱入してきても、ナシゴレンを食べる手を止めない、このマンションの住人たち。なかなか大物揃い。

「風呂場の排水管に詰まってた。」

得意げにマードックは言い放った。

「これで依頼、二件とも解決！」

コングに向けてVサインを出すマードック。

「ありがとうございます！」

カメを握り締め、感涙にむせぶミラー。実に満足そうなマードック。リストに消し線を二本引くコング。ミラーとマードックを見つめて、うんうん、と頷くハンニバル。

「お婆ちゃん、俺にもナシゴレン。それと、冷蔵庫のファムタも！」

「はいはい。」

マードックの言葉を聞いて、ギクリとするスタングとヴォルフ。二人もちゃっかりナシゴレンを食べているのである。火傷した上顎も、一時期、痛いことを忘れていたんだが、ナシゴレンのせいで再び痛い。

ミセス・ハイデンは、何事もなかったかのように、ナシゴレンとファムタをトレイに乗せて持ってきた。それを受け取り、席に着いて（パンツ一丁だけど）、ファンタをプシュッと開栓するマードック。缶ごと、ゲキゲキと飲み、ゲフーと息をつく。

「美味ェー。労働の後のファムタは最高だね！」

『よかった、バレてない。』

スタングとヴォルフは安堵の息をついた。

「あら、部屋、片づけたのね。」

そう言ったのはマリアンだった。ミセス・ハイデンに向けての言葉である。散らかっていたはずのWTPP用具がすっかりと片づけられているのに気づいて。

「ええ、そのお二人が片づけて下さったのよ。」

ミセス・ハイデンがキムの皿にナシゴレンのお代わりを乗せた後、杓文字の先で二人を指した。

「……おじさんたち、何でここでご飯食べてるの？」

オリバーが尋ねた。子供は意外にも目敏いものである。

「……あんな、スタングか？」

ハンニバルも、やつとのことと気がついた。

「黒服はどうしたんじゃ？」

ハイデン氏が余計なことを聞く。

「着替えたんです！」

答えられずにいるスタングに代わって、ヴォルフが言い切った。それで、すんなりと納得してもらえらるかどうか、非常に不安にだったのだが……納得してもらえたようだ。みんな、小さくコクコクと頷いている。

「ああ、それで思い出したぞ。マリアン、あんなの旦那、

ハイジャックされた飛行機に乗っていったぞ。」

「何ですって？」

「ダディが？」

ハイデン氏の言葉に、マリアンとオリバーが声を裏返した。

「親分は？」

そう聞いたのは、もちろんスタング&ヴォルフ。

「もうすぐ着陸するんじゃないでしょうかねえ。」

微妙に緊迫した中、のんびりとハンニバルが言った。

ちょうどその頃、問題の機中。

乗客のチェックを終えたストコドッコイは、コクピットで機長にビンタをかましていた。

「おい、おい、そろそろ着陸だよ、起きて、起きてー。」
「ビシ！ ビシ！」と頬を張れども、一向に起きる気配のない機長。ストコドッコイは、諦めて床に腰を下ろした。

と、そこにゴロゴロと聞こえてくるワゴンの音。見ると、スチュワードスよろしくエプロンをつけたキンケイド氏が、小脇に酒壺を抱えてワゴンを押してくるのであった。

「ビールとチキン、どっちにしますか？」

「ビール。」

思わず即答するストコドッコイ。思うに、機内でのビールはチキンって、人間が最も素早い決断を迫られる問いの一つではなからうか。

「はい。」

と、銀のパッケージを差し出すキンケイド氏。

「何、これ。エコノミー用のランチじゃないの。」

「済みません、ファースト用のプレートは調理が大変そうだったので。でも、これも食べられないことはないと思いますよ。ちゃんと温めたし。それに、僕ら用の燃料もありましたし。」

にっこりと酒壺を差し出すキンケイド氏。それを見たストコドッコイの顔が、ぱっと輝いた。

「スミノフか。アメリカ産のはあまり好きじゃないんだけど、まあ、贅沢も言ってるんじゃないかな。」

ストコドッコイは、そう言ってボトルを受け取ると、

ラッパ飲みで一口。

「くーっ、沁みる。堪らんね、こいつは。」

「あまり飲みすぎないで下さいよ。これからやることいろいろあるんだし。」

「大丈夫だよ。ウオトカの本程度で潰れるロシア人はいないよ。それより、君もやんなよ。少しは肩の力を抜かないと、着陸まで持たないよ。」

「それもそうですね、じゃ、失礼して。」

そう言うのと、キンケイド氏は、ストコドッコイに注がれるままにワイングラスでウオトカを受け、それを一気に飲み干した。

「お、いい飲みっぷりだね。イける口かい？」

「いえ、そうでもないんですけど、私、アブダビに勤務しておりまして、向こうでは基本的に禁酒だったので、久しぶりのお酒が美味しくて。いやあ、ウオトカって美味しいものですねえ。」

「ね？ これを飲みつけちゃうと、アメリカ人がよく飲むビールだのカクテルだのってのは、酒の範疇にも入らない色水だつてのがわかるでしょ？」

「ええ、本当に。このパンチの効いた味に比べたら、ビールなんて馬の小便ですわ。」

「いいね、あんたの気に入ったわ。じゃ、どんどん行こう、どんどん。」

キンケイドのグラスにお代わりのウオトカが注がれ、それも瞬く間に飲み干された。ストコドッコイも、もちろんガンガン飲む。

あつと言う間に一本目の壺が空き、二本目の栓が抜かれた。さすがにウオトカだけでは喉が渇くので、チェイスー代わりにビールも開き、ついでにワインも数本開け、二人は酒盛りを続けた。

二人以外寝静まっている機内。管制塔からの通信だけが虚しく響いていた。

一時間後。

「くあーっ、酔っ払っちゃっちゃにやー。」

と、真つ赤な顔のキンケイド氏。頭には、お決まりのネクタイ鉢巻。

「しかし、しゃ、しゃしゅがロシアの方でしゅな、こん

だけ飲んで、まだ酔っ払わにやいにやんで。」

「そりゃ、僕だって、伊達にマフィアやってるわけじゃないもんね、ヒック。あ、あんたこそ、アメリカ人にしとくにや、もったいない、ヒック、いー飲みっぷりよ、ヒック……。」

「にやにをおっちゃいましゅか、よっ、大統領、プレジネフ。」

最早、サラリーマンの接待モードに入っているキンケイド氏である。そしてストコドッコイも、顔色こそ白いままだが、上半身はメトロノーム並みにグラグラ揺れている。

「いやあ、あんたには、ぜ、ぜひ、ヒック、うちのお祖母ちゃんのおボルシチをご馳走したいね。こんな不味いレトルトの肉なんかより、ずーっとウオトカに合うんだぜ。いやあ、食べさせたいわ、お祖母ちゃんのおボルシチ。ヒック。」

「しよれはいいでしゅね、ぢや、ロシアに行った際にはじえひ……。」

「……そう言えば、実家、随分帰ってないなあ……帰りたいなあ。」

大きな頭を前後に揺すりながら、ストコドッコイは寂しげに呟いた。

「しよのうち帰れましゅよ、私らってほりや、三日前には、クリシユマシユに家に帰れるなんて思ってもみなかったんでしゅかりや……。」

キンケイド氏も、ストコドッコイの揺れに合わせてグラグラと揺れ始めた。

いや、揺れているのは飛行機の方か。

コクピットのヘッドホンから、管制塔の声がかすかに聞こえていた。

『……697便、聞こえるか。おい、応答しろ。悪い知らせだ。そっちの進路と、大型ハリケーン、ジェーンの進路がぶつかってるんだ。そのまま進むと、あと一時間でハリケーンに突っ込むぞ。おい、誰かいないのか？ 応答しろ、おい……。』

ソフトフォーカスの中、二人の男の子が歩いている。
『どうして？』

画面にそう文字が浮かび、一人の男の子の困った顔がズームアップされる。

場面変わって、にこやかな二人の男の子。一人が大人の男女に連れられて車に乗る。笑顔で手を振る二人。

『どうして?』

再び浮かび上がる文字。車の中で、突然泣き出す男の子。その泣き顔がフェイドアウトしていき、直後、ジェイソンの写真とフェイスマンの写真とが現れて交差し、たかと思うと、すっと消え、いかにもクリスマスの飾りつけの部屋の写真の上に、びしりと電話番号が現れる。ナレーションは、こうだ——全世界を感動の涙で濡らした話題作『どうして?』、あなたはもうお読みになりましたか? 『どうして?』と無垢な疑問を投げかけ続けた作者ジェイソンと、彼の疑問に答え続けたテンピー。あの時、親友であり、そして兄弟でもあった二人。離れ離れになった二人が三十年の歳月を経て、今、再会します。その感動の場面に、あなたも立ち合いませんか? 再会のパーティーに参加を希望される方は、今すぐこちらまでお電話下さい。

「一時間で作ったにしては、よくできてるわね。」

自宅のテレビの前で腕組みをして、マリアンが言った。「でしょ。もう社長にはビデオの原版を渡しておいたし、社長も『数時間後には約束通りオンエアされるだろう』って言うてたわ。」

ビデオデッキからコピーしたテープを取り出して、満げなキム。

「ナレーション、私がやったのよ。」

「うん、聞けばわかるわ、あなたの声だつて。ご苦労さま。プロのナレーターみたいね。」

マリアンにそう評価されて、キムはちよつと照れたようだった。

「で、エヴェレットさんはどうしてるの?」

「多分、寝てるんじゃない? 彼、尾骨折れてたし。」

「尾骨?」

「お尻の骨。本来なら尻尾になるとこ。ほら、彼、テンピーの写真撮ってたじゃない。そのラストで、テンピーにジュードーみたいに投げられたんだって。」

「大丈夫なの? 骨折なんですよ?」

「湿布渡しといたから大丈夫。CM作ってる間、ずっと立ってたから、患部に負担はかかってないはずだし。よくあるのよ、尾骨折つて。」

「そうなの。ならいいわ。」

実は、それほど心配していないマリアンであった。

「そう言えば、旦那は大丈夫なの?」

「え? ……ああ、忘れてたわ。あの人が大丈夫かどうかなんて、私にわかるわけじゃないじゃない。」

そう、ハンニバルとハイデン氏が無線傍受を続けているものの、あれから何も進展がないのである。

「でも、何となくなんだけど、大丈夫なんじゃないかって思うのよね、私。」

「そうね、あの人が事件に巻き込まれても、するつと隙間から逃げ出して隠れていて、事件が解決してから、ひょっこり顔を出しそう。」

「そうそう、そんな感じ!」

「それで、誰も、あの人がいたことにも、いなくなったことにも、また現れたことにも、気づかないの。」

「そう!」

本人がいらないからと適当なことを言っている女二人。本人がいても同じことを言うと思うけど。

「プライアンのことはさて置いて、パーティーの準備の方取りかかってくれる? 私は電話番号しなきゃならないし。」

「OK。有給休暇届け出してきたから、思う存分、WTPPに打ち込めるわ。」

「頼もしいわね。頼んだわよ、キム。」

「任せて!」

そうしてキムは、颯爽とキンケイド家を出ていった。

小洒落たレストランでは、フェイスマンとハナコ・ヤマダ嬢とが、盛り上がりがないことこの上ない会談を継続していた。

ハナコ嬢の前には分厚いフィレステーキ。一方、フェイスマンが口に運んでいるのはコーヒーだけという格差。

「あの!」

フェイスマンはコーヒークップをソーサーに置くと、

意を決してハナコ嬢に声をかけた。ハナコ嬢は、口一杯に頬張った肉をもぐもぐとくんとやってから、お上品にナブキンで口元を拭う。その仕種は楚々としたものであった。口さえ開かなければ。

「ようやく口を割る気になった?」

「そんな、人間きの悪い。」

「ふざけないで! か弱い乙女が恋人に会うのを妨害してくれたんだから、この落とし前はキッチリつけてもらうわよ。」

なまじ外見だけは本当にか弱げなだけに、妙な迫力があると言うか、鬼気迫ると言うか。

『何て言うて切り出したら、穏便に身を引いてくれるんだらう……?』

フェイスマンはトホホな気持ちで考えた。

『実はドウーニ君は不治の病で……草の根分けても本人を探し出して看病するとか言いそう。それじゃ、実は君とドウーニ君は生き別れの兄妹で……つて明らかに人種違うし!』

考え込んでしまったフェイスマンを、ハナコ嬢はひどく剣呑な目つきで睨んでいる。

だが、しかし、案ずるより産むが易し。気詰まりな沈黙は、レストランに飛び込んできたキムによって破られた。

「こんなとこにいたのね! もうっ、忙しいんだから、さっさと来てちょうだい。」

キムはWTPPの準備の最初の一歩として、人手集めに回っていたのであった。そして、ずんずか道を歩いていく際に、ガラス越しにフェイスマンがコーヒーなど飲んでるのを見つけて回収に乗り込んできたというわけ。

一方、キムの乱入に慌てたのはハナコ・ヤマダである。「ちよつと! 何よ、あんた。その人とは今、この私が話してるのよ!」

何だかんだ言っても、ハナコ嬢にとって、フェイスマンはドウーニに繋がる唯一の情報源。ここで逃がすわけには行かないのだ。

キムは割って入ってきたハナコ・ヤマダを頭の天辺から足の先まで見て、フツと鼻先で笑った。

「引っ込んでな、ブス。」

「ひっ……。」

思わず絶句するハナコ嬢。彼女もなかなかの線を行っていたのだが、やはりキムは迫力が違う。伊達に海千山千の患者相手に看護師として君臨し続けているわけではない。

「さっ、行くわよ。」

半ば襟首を引き摺られるようにして、フェイスマンはレストランを出た。

が、律儀にもハナコ嬢に向かって一言伝えるのを忘れなかった。

「そういうわけなんで、ドワーニ君のことは諦めて下さい。」

「できたぜ！」

コングが叫んだ。ここはキム宅の庭。見上げるその先にあるのは、ハイデン宅の新しいベランダであり、キム宅のテラスの天井でもある。普通のベランダより大きく張り出したハイデン宅のベランダは、当たり前のことだが、キムの庭に影を作る。普通の住人なら、上の階の不法建築など許しはしないのだろうが、そこはキムのこと。コングに頼んで（脅して）、ちゃっかり自分の庭にテラスを作らせてしまったのだ。

出来上がったベランダ（テラス）は、まずキムの庭にぶつと鉄筋を四本立て、その上に鉄の骨組みで床（天井）の基礎を作製、その上にベニヤの枠を嵌め、コンクリートを流して固める。そのコンクリに、ハイデン夫人の好みを取り入れた真っ白な木の手摺を突き刺して固定し、上は完了。下は、四本の鉄筋の内側にサンタフェ風のタイルを入れて完了。

「こんなもんでどうだい。」

コングは二階に向かって叫んだ。二階には、ベランダ完成の報を聞き、イソイソと駆けつけたハイデン夫妻。

「おお、なかなか広いじゃないか。」

「これなら、鉢植えを沢山並べても大丈夫ね。」

「テーブルを出してビールも飲めるぞ。」

「ええ、お茶も飲めますわ。」

口々に喜びの声を上げながらベランダに駆け寄るハ

イデン夫妻。

「おい、まだ入らないでくれよ。コンクリが半乾きだからな。」

コングの忠告は一瞬遅く、今まさに固まらんとしているコンクリの床に雪崩れ込んだハイデン夫妻は、足首までコンクリに埋まり、そのまま固定された。

「なあ、爺さ……。」

屋上で盗聴を続けていたものの、話し相手がいなくなつて寂しい思いをしていたハンニバルが、ハイデン氏の意見を伺おうと彼の家に勝手に入り、ずんずんとリビングへ進んで、ベランダに立つハイデン夫妻の後ろ姿に声をかけ、そして言葉を止めた。

「ああ、済まん、こんな格好で。」

ハイデン氏は二本の足をベランダに埋め、ハンニバルの方をギギギと振り返った。動きがどうもロボっぽい。その時、コングが駆け込んできた。

「大丈夫か、爺さん、婆さん！」

「そりや大丈夫さ、足が動かないってこと以外はな。」

「とっても冷たいわ。早く取って下さいな。」

ベランダの手前（屋内）に跪き、コングはベランダの表面に手を触れた。完全に固まっている。

「どうしたんだ？」

ハンニバルがコングを見下ろして尋ねた。

「フェイスの奴、気イ利かせてくれやがって。」

ずいっとコングが差し出したセメントの袋、それには『超瞬間硬化セメント・約二時間の養生で完全硬化』と大きく書いてある。普通一週間かかる養生が二時間で済むとは画期的！

「ほう、セメント業界も進歩したもんですね。」

「こりやあ切り出して割ってかなきゃなんねえな。」

ハンニバルが袋の表側を見ている間に、コングは屈み込んで裏面の説明書きを読んでいた。

「ハンニバル、爺さんたちを楽な姿勢にしてやってくれ。俺ア車からチェーンソウとノミを取ってくるぜ。」

「ああ、わかった。」

ダッシュでハイデン家を出ていくコング。ハンニバルはセメントの袋を床にポイッと落とし、ベランダに顔を

向けた。

「椅子が何かでいいですかね？」

「ぜひ頼む。」

「膝かけもお願いできるかしら？」

蛇足ながら、ハンニバルはまだバジヤマ姿である。と、そこに。

「お婆ちゃん！」

と駆け込んだのは、今度はマードック。手にパッチワークの布と、針と糸を持っている。それに図案も。

「はいはい、ここですよ。」

ベランダからハイデン夫人が何気なく答える。椅子に座って、膝かけをして。

「パッチワーク手伝って！」

ちょうどハイデン夫人は退屈し始めたところだったので、その依頼を快諾した。

ハンニバルはハンニバルで、ハイデン氏の向かいに椅子を出してきて座っている。タクシーの運転手、しなくいいんだらうか。

「無線を聞いてましたらね、かすかに歌声が聞こえるんですわ。」

「管制塔で宴会でもしとるのか？」

「いや、飛行機の方だと思っんですけどね。それがどうも、ロシア民謡ばかりで。さっきはステンカ・ラージンっぽいのが聞こえてましたよ。」

「犯人はロシア人か？」

「いや、犯人は寝ている間にマリアンのだんなに縛り上げられてるはずなんで、いくら馬鹿な奴らでも、ロシア民謡を歌う精神的余裕はないでしょう。」

「はて、となると……マリアンとこのはロシア好きじゃったかのう？」

「アラビアの方に左遷されたんじゃないかなかったですか？」

ハイデン夫人が手を休めずに口を挟む。

「ちよっと待って下さいよ……。」

ハンニバルが小さく呟いた。ロシア……何か聞き覚えがある。そう、つい最近聞いたような……。

「そうか、親分さんだ！ マリアンの旦那だけじゃなくて、スタングの親分も起きてるんだ！」

「……誰だ、そりゃ？」

「あたしも『親分』としか知らないんですがね。何でもロシア出身のヤクザのボスだそうで。」

「そうか、ヤクザのボスも起きていて、マリアンとこのに加担しているとなれば、話は見えてきた。」

「スタングは？ 確認を取ってみよう。」

「あの二人なら、このマンションを測量するって表に出ていきましたよ。」

そう答えたのはハイデン夫人。

「マンションの測量？ そりゃまた何で？」

「知りませんよ、理由なんて。仕事なんじゃないかしら？」

ハンニバルの頭の中で、いろいろと見聞きしたことが繋がってきた。バツと立ち上がりざま、後ろを振り返る庭を囲う樹木の向こうに、煌く海が見える。

「こいつは……まずいことになるかもしれないよ。」

珍しく深刻な表情で、ハンニバルは誰へともなく言うのだった。

そんな、ハンニバル一人だけシリアスな状況下に、コングがチェーンソウと養生シートを携えてえつつらおちちらやって来た。

「悪い、遅くなっちゃった。」

普段から管理が行き届いていないバンの後部物置で、チェーンソウは銃の下の方に埋まっていた上、各種のヒモっぱいものが引つ絡まっついていて、それをほぐすのに時間がかかったのである。

「じゃ早速、爺さんの方から……。」

「わしは後でいい、先にこいつの方を頼む。足が冷えるとか何とか言っとなからな。」

何と美しき夫婦愛。と言うか、ハイデン氏、チェーンソウにちょっとビビってる感じ。

「おし、わかった。おい、モンキー、婆さんにシートかけて押さえてろ。破片が飛ぶかもしれないからね、顔背けてろよ。」

「あー、はいはい。」

マードックはパッチワークの布を脇に置いて、養生シートでハイデン夫人を包んだ。はつきり言って、マード

ック、事態を把握してません。

「膝かけも退かしとけ。」

「ほいな。お婆ちゃん、ちょっとゴメンね。」

と、膝かけを取って、それも脇へ。

プラグをコンセントに差し込んで戻ってきたコングが、チェーンソウを構える。

「絶対、動くんじゃねえぞ。」

「動こうにも動けませんよ。」

養生シートの中から気丈な声が返ってきて、コングはフツと笑い、スイッチを入れた。

ブイ~~~~ン。

慎重に、コンクリートに切れ目を入れる。

「いでででで。」

シートを押さえているマードックの素手に、コンクリートの細かい破片がビシバシと当たっている。

「うるせえ、黙ってろ。」

マードックの声よりもチェーンソウの音の方がうるさいんだが。

と、その時。膝かけがふわっと風に飛ばされた。ハンニバルがそれを上手くキャッチする。軽い膝かけはふわっと飛んだが、パッチワークの方は結構重かった。ずらず、と人知れず飛び、運悪くコングの手元に落ちた。

ガガガガガ！

「うわっ。」

慌ててチェーンソウのスイッチを切ったが、遅かった。マードックが手間暇かけて縫ったパッチワークは、チェーンソウによりズタズタになってしまったのであった。そして、パッチワークを巻き込んだチェーンソウは、コングがスイッチを切るまでもなく、最早動かなくなってしまった。

空の上では、未だロシアの親分と砂漠の商人が飽きもせず宴会を続けていた。

「♪久遠に轟く〜ヴォルガの流れ〜、眼にこそ映えゆく〜ステンカ・ラージンの〜船〜、眼にこそ映えゆく〜ステンカ・ラージンの〜船〜。」

「何の歌？」

「ステンカ・ラージン。知らない？ ロシア民謡。」

「知りません。申し訳ないけど。」

「いい歌なんだけどなあ。」

と、歌い続けるストコドッコイ。静かな機内に流れるロシア民謡。

「ドン・コサックの群れに〜今湧く群り〜、奢れる姫なり〜飢えるは我ら〜、奢れる姫なり〜飢えるは我ら〜、奢れる姫なり〜、その昔帰らず〜ヴォルガの流れ〜、覚めしや〜ステンカ・ラージン、眉根ぞ悲し〜、覚めしや〜ステンカ・ラージン、眉根ぞ悲し〜。ア~~~~。」

グラリ。

ストコドッコイの調子つ外れな歌が最高潮を迎えた時、飛行機が大きく揺れた。思わず立ち上がるキンケイド。

「何？」

「どうしたんでしょう？ ちょっと見てきます。」

そう言って操縦室に向かったキンケイド。

「済みません、ちょっと失礼しますよ。」

操縦室の床に転がしてある何名かのテロリスト（拘束済み）を跨ぎ、操縦席でグツタリしている機長の横へ。

目の前に広がるのは、広い空、ではなくて。

「あれ？ 今、夜だったけ？」

アルコールに麻痺した頭でキンケイドが見たものは、真っ黒な雲に遮られた視界と、時折斜めに走る稲妻。飛行機は、いつの間にかハリケーンに突っ込んでいた。

キンケイド氏は事態を把握できずにいた。

「何だ、これ？ どうなってるんだ？」

そうこうするうちに、操縦席のシートに両手で掴まっていなければ転がってしまうほど、揺れが激しくなってきた。床に転がっているテロリストたちは、揺れに伴い、狭い操縦室をあつちにゴロリ、こつちにゴロリ。

畳みかけるように、コクピットの機器類がピコンピコンと点滅を始めた。熟睡中の機長の耳元で、ヘッドホンがごちゃごちゃ言っているし。いや、ヘッドホンが言っているわけではなくて、ごちゃごちゃ言っているのは管制塔の人なんだが。

そのヘッドホンを取り、キンケイドは自分の耳に当てた。

『誰かいらないのか、697便！ 応答せよ！』

「あー、はい、います。これ、697便なんですか？」
『ああ、697便だ。って、君、何をそんなにのんびりしているんだね？ 今まさにハリケーンの中じゃないのか？』

「ハリケーン？ ああ、なるほど。だから暗くて、稲光がして、やたらと揺れているわけですね。」

『そうだ、その通りだ。このままでは墜落する。オートパイロットを解除して、手動に切り替えるんだ。』

「手動？ 私が運転するってことですか？」

『運転じゃなくて操縦だ。パイロットもコ・パイもまだ起きてないんだろ？ そうすると、君に操縦してもらうしかない。もしくは、パイロットを起こすか。』

それを聞くなり、すっかり酔いの覚めたキンケイドは、早速パイロットに往復ビンタをかました。

「起きません。」

『じゃあ、君が操縦するしかない。今現在、高度三万フットを維持している。ちょうど雲の真っ只中だ。四万五千フットまで上昇すれば、雲から抜ける。』

「ちょ、ちょっと待って下さい、そんなことできませんよ！」

『大丈夫だ、機体は高度五万フットまで耐えられるようにできている。』

「そういう問題じゃなくて！」

『操縦方法は逐一指示するから、心配しなくていい。』

「心配ですって！ と言うか、無理ですって！」

と、その時、足元の覚束ないストコドッコイが、ふらりふらりと操縦室に現れた。

「どーしたってゆーの？ ヒック。」

キンケイドは慌ててマイクを手で握った。

「今、ハリケーンの中に入ってしまったっているそうなんです。それで、オートパイロットを解除して、手動で高度四万五千フットまで上昇しなきゃいけないそうです。」

「あっそ。四万五千ね。」

ストコドッコイは、よっこいしょ、とパイロットを操縦席から引き摺り下ろし、床に転がした。そして、空いたその席に座る。

「えーと、あ、これか。オートパイロット解除っと。」

ポチッとボタンを押すと、機体が今まで以上に揺れ出した。

「でもって、高度計は……ああ、これね。今、二万八千。」

「落ちてるじゃないですか！」

「あーあし、今、上げるって。」

操縦桿を思いきり引き寄せる。

「うわっ！」

機首が上がリ、客室の方へ転がっていきそうになるキンケイド。

その直後、突然、前方からのGがかかった。どうやら機首を上げすぎて、抵抗の大きくなった機体が後方に流されているようだ。このままでは、機体が垂直になって墜落するか、さもなくば、ハリケーンの風にコントロールを奪われて墜落するか、の二択になってしまう。いずれにせよ、墜落することには変わりはない。

「ヤバ、行きすぎ。」

操縦桿をやや戻す。何とか状態は落ち着いたように思える。しかし、依然として揺れはただひたすらに激しいばかり。キンケイドは、片手でマイクを握ったまま、残る一方の腕で操縦席のシートに抱きついてのことしかできずにいた。

「四万まで上がったよ。あとちょっと。」

ストコドッコイがそう言った頃から、振動が徐々に収まってきた。稲妻も少なくなってきた。

その一方で、機体がミシリ、ミシリと音を立てるようになった。恐らく、外圧が低下しているせいだろう。

「四万二千。」

高度計をたまに見ながらも、ストコドッコイは他の計器のチェックを怠らなかつた。そのおかげで、機体の角度もそれほど変化していないし、オートパイロットで飛んでいた時と進路もそれほど変化していない。

キンケイドにはそのことがさっぱりわかっていなかったが、管制塔の職員たちにはわかっていた。ヘッドホンから賛辞や次なる指示が聞こえてはいるのだが、キンケイドはそれさえさっぱり聞いちゃいなかった。全く役に立たない人だこと。

「四万四千……抜けたわ。」

操縦桿が抜けたわけではない。雲から抜けたのだ。太

陽の光が降り注ぎ、最早、揺れはほとんどない。機体が軋んでいるだけだ。

ふう、と息をついて、ストコドッコイは操縦桿を元の位置に戻した。ゆっくりと機体が水平になる。

「君、ねえ君ったら。」

シートにしがみついたままのキンケイドを半ば振り返り、ストコドッコイが声をかける。

「あ、あれ？」

顔を上げ、キョロキョロと辺りを見回す。

「管制塔に、どこに行けばいいか聞いてくんない？」

そんなキンケイドに、ストコドッコイは平然として聞いた。

「どこに行けばいいか、ですか？」

キンケイドはマイクを握っていた手を放し、管制塔に向かって尋ねた。

「えー、管制塔の人、この飛行機はどこに行けばいいんですか？ ロサンゼルス国際空港ですよねえ？」

そんなの、わかりきってる、という風な口調で。

『北緯三三度五六分三秒一三、西経一一八度二四分二九秒〇七だ。繰り返す、北緯三三度五六分三秒一三、西経一一八度二四分二九秒〇七。』

「え？ ちょっと待って下さい、もう一度、ゆっくりお願いします。」

いきなり数字を言われるとは思わず、キンケイドは焦った。

『北緯、三三度、五六分、三三秒、一三。』

マイクを再度握って、ストコドッコイに言う。

『北緯、三三度、五六分、三三秒、一三。』

ストコドッコイが、その数字を計器に入力する。

『いいか、次行くぞ。西経、一一八度、二四分、二九秒、〇七。』

『西経、一一八度、二四分、二九秒、〇七。』

「オッケ、わかった。もう通信切っちゃっていいよ。」

「どうやって？」

んー、とストコドッコイがヘッドホンから繋がっているコードを目で辿り、行き着いた先のパネルをパチパチと操作する。

「これで切れた。」

ヘッドホンから何も聞こえなくなり、ストコドッコイの操作が正しかったことを証明した。

頭につけていたヘッドホンを、床に転がっている機長の頭に返すと、キンケイドはその場にヘタリと座り込んだ。

「はゝ、どうなるかと思ったゝ。」

「うん、どうなるんだろうね。」

操縦桿を握って、ストコドッコイが呟いた。

「何ですって？」

現機長を見上げるキンケイド。

「このハリケーンが空港まで続いたら、またあの中を突っ切らないと降りられないし。僕も三万フィート以上に上がったの初めてだし。それに、こんなでかいの操縦すんのも初めてだし。空港が晴天で、滑走路がロシア並みに長くて、不安要素が全くなければ、多分、何とか着陸できると思うんだけどさ。」

嫌なことをすら言ってくれるストコドッコイ。だが、キンケイドは、それを聞いて打ち沈んだわけではなかった。

「ハリケーンが空港まで続いているってことはないでしょう。ロスにはハリケーンなんて来ませんから。少なくとも、私がロスにいた二十五年間、ハリケーンは一度も来ませんでした。それに、この時季、ロスの降水量は少ないですし。」

LAつ子（現住所はアブダビ）が、明るい話題を提供する。

「そりゃあいい。でも、あとで念のため管制塔にロスの気象とこのハリケーンの勢力について聞いて聞いて。」

「わかりました。」

大雑把そうに見えるストコドッコイだが、案外細かいところもあるのであった。

その頃、ストコドッコイの部下二名は測量に励んでいた。測量に来たのに、なぜか五メートルの巻尺一個しか持っていなかった二人は、かなりの忙しさでマンション一周の長さを計り、次に敷地全体の広さを計った。

「ふう。これで大体、寸は取れたな。あとは何だ？」

数値を手帳に書き込みながらヴォルフが言った。

「ええと、近所にある公共施設とショッピングセンターの配置図を作る。図工は苦手だ。面倒臭いな。」

と、スタンゲ。

「描かんでいい。地図を買えば済むだろうが。」

「名案だ。じゃあ、本屋に行こう。」

「ああ。」

巻尺をしゅるつと片づけ始めた二人の元に歩み寄る一人の男、ハンニバルである。

「やあ、お二人さん、精が出るね。仕事は順調かい？」

「ああ、さっきのタクシードライバーか。おかげさまでもうほとんど終わって、これから本屋に行くところだ。」

「本屋？ 結構遠いぞ。」

「マジか？ 遠いって、どれくらい？」

「徒歩なら、六十五分だな（ウソ）。」

「そりゃ遠いな。」

「乗っかってやらんでもない。」

「そりゃ助かる。チップは弾むぜ、おっさん。」

というわけで、ヴォルフとスタンゲはハンニバルに促されマンションの前へ。

「これだ、乗れ。」

と、ハンニバルが指し示したのは、フリオのタクシーではなくて、紺色のバン。

「これ？ タクシーじゃねえのか？」

「まあ、いいから乗れ。」

渋々乗り込んだヴォルフとスタンゲに、既に中にいたフェイスマン（ほうほうの態でキムから逃げました）が

「お疲れー」と声をかけた。運転席のコングも振り返って頷く。そして、パッチワークを肩にかけたマードックの姿も。

「ちょっと待てよ、こいつは乗り合いバスか？」

「そうとも言えるかもね。」

と、フェイスマン。

「行き先は一緒だな。」

最後に乗り込んだハンニバルが、ドアを閉めながら言った。

「え、みんな本屋に？」

「なわけないだろう。コング、出してくれ。さて、これから空港にあんたたちの親分を迎えに行きますよ。」

遡ること一時間前。

フェイスマンに逃げられたキムは、WTPP準備のためのメンバーを確保すべく、ホテルの公衆電話からマンションの各家に電話をかけまくった。無論、普通なら、同じマンションに住んでいるからと言って他の家の電話番号など大家以外には知れているはずもないのだが、このマンションの住人は皆『どうして？』ファンクラブのメンバー。その会員リストに電話番号ぐらいい載っているのである。

キムからの呼び出しを受けてWTPP会場に向かうこととなったマスナン爺さんとマドモアゼル・アントワネット、そしてオリバー&ユリア。マリアンは電話での問い合わせが後を絶たないため、自宅を離れることができず、エヴェレット氏は腰痛のため動けず、クツワダ氏は会社におり、ミラー氏は締切を一日間違えていて現在大慌て中、フリオはガブリエラと新生児に付き添い（もう少ししたら教会にも行かにならんし）、ドウニ君は海外旅行中だし、ハイデン夫妻はベラングがどうのこのうという状況だそうだし、ヤンソン一家は相変わらず何してるかわからないし。そんなわけで、集まったのは老若男女の両端部分。働き盛り皆無。

四人が向かうは、とりあえずバス停。

「次のバスまで、どのくらい？」

アントワネットが偉そうに聞く。マスナン爺さんは懐から時計を出し、時刻表を覗き込んだ。

「あー、あと三十二分じゃな。時刻表通りにバスが来れば、の話じゃが。」

「三十二分も待つのか？」

オリバーが心底嫌そうな声を上げる。

「あの、マスナンさんかアントワネットさん、車持っていないんですか？」

そう聞いたのはユリア。タクシー運転手の娘としては、車を持っていない大人がいるなんて想像に難い。そのタクシー運転手は現在ちっとも役に立たない状態なのが残念。その上、タクシー自体、ハンニバルの管理下にある、どこにあるかさっぱりわからない。

「昔は持ったんじゃがなあ。」

「二応ライセンスは持つてるけど、もう長いこと運転はしてないわね。」

二人の言葉を聞いて、オリバーとユリアは深い溜息をついた。

その時、俯いたユリアの耳に、知った声が飛び込んできた。

「おい、スタング、そっちの端、ちゃんと押さえてろ！」

巻尺本体を持ったヴォルフである。五メートルほど向こうにスタングの姿も見える。

「ねえ、オリバー。またヴォルフさんに連れてってもらいましょうよ、車で。」

「うん、いい考えだね、ユリア。」

そんなわけで、二人の子供はちよろちよろとヴォルフのところに向かっていった。

「ヴォルフさん！」

駆け寄ってくる二人を目にするなり、ヴォルフの表情が急変した。音で表すなら「ほんわ〜」である。口許はだらけきって、目尻は下がりまくり。

「オリバー！ ユリア！」

巻尺を放り出し、中腰になって、「さあ、お出で！」のポーズ。その腕の中に飛び込んでいくオリバーとユリア。

「あのね、ヴォルフさん、お願いがあるの。」

ヴォルフのTシャツの右肩の部分をきゅっと握って、ユリアが言う。

「僕たち、町に行きたいんだけど、バスが全然来ないみたいなんだ。」

ヴォルフのTシャツの左肩の部分をきゅっと握って、オリバーが言う。

「何だ、そんなことか。じゃ、おじさんが連れてってやるよ。」

オリバーとユリアがすべてを言わなくても、子供好きのヴォルフは即、安請け負い。

「おいおい、測量はどうすんだよ。」

そんなヴォルフを見下ろすスタング。スットコドッコイ直筆の指令書（チラシの裏に殴り書き）をびらびらと振りながら。「実行済み」を意味するレ印は、まだ一つしかついていない。

「これ全部終わらせねえと、親分にドヤされるんだろ？ いっくら親分の乗った飛行機がハイジャックされてるからって、あの人のこったから、定時にゃ戻ってくんだらうし。」

「……そうだよな……。」

チッ、とヴォルフは舌打ちした。

「やっぱりダメかあ……。」

悲しそうな顔をするオリバー。ユリアに至っては、口をへの字にして、今にも泣き出しそうである。演技かもしれないが。

「それじゃあ、あの、ヴォルフさん……車を貸してもらうっていうのは……？」

「車だけ？」

ユリアが掠れた声で言ったのを、ヴォルフは聞き返した。

「そうだ、アントワネットさんがライセンス持つてると言ってたから！」

ヴォルフには「アントワネットさん」が誰だかわからなかったが、「困っている子供たちの力になってやりたい」と「いい加減に仕事を終わらせないと、バイカル湖に沈められるかもしれない」の妥協案として、「車を貸してやる」というのは名案だった。

「ああ、俺の車ぐらい、自由に使ってくれ！」

明るい顔で、ヴォルフは頷いた。

「ありがたい、ヴォルフさん！」

二人の子供にぎゅうっと抱きつかれて、彼は鼻の下を伸ばしつつ、天にも昇らん気分であった。その後ろで、スタングが溜息をついて首を横に振っていたことなど、ヴォルフは知る由もなかった。

それから数分後、町に向かって去っていく自分の車に手を振りながら、ヴォルフは、財布も運転免許証も身分証明書（偽造）も生乾きの服も車の中だ、と思いついたのだが、もう遅い。

「俺たちの服、車中だ……。」

恐る恐るスタングに伝えたところ、スタングは口だけで笑って、吐き捨てるようにこう言った。

「今晚の飲み代、お前の奢りな。」

その目は、レニングラードに吹く北風よりも冷たかった。

た。

ヴォルフが車を手放すよりさらに前、二〇六号室のベランダでは。

（Aチームの作業テーマ曲、微かにかかる。）

おしゃカになったチェーンソウは諦めて、ノミと槌とでコンクリートを割っていくコング、ハンニバル&マードック。地道な作業である。

その間、ハイデン夫人はズタボロになったパッチワークを何とか元通りにしようと奮闘し（ただし両足は依然としてコンクリ内）、ハイデン氏はハイジャック機の盗聴を再開していた（もちろん両足は依然としてコンクリ内）。

ハイデン夫妻の足がコンクリから解放された時、Aチームはハイジャック機の置かれた状況を理解し、その内部の状態も確信していた。そして空を見上げて結論に至ったのであった。

ロシアン・マフィアの親分が、定刻に飛行機を着陸させる。キンケイド氏が足手まといになるようなことを仕出かさない限りは。

一方、ハイデン夫人の類稀なる技術と集中力により、細切れになったパッチワークは、さらに細かいステッチの入ったパッチワークとして生まれ変わったのであった。ハイデン夫人をパッチワークごと抱き締めるマードック。

ベランダの瓦礫を片づけているところに駆け込んできたフェイスマン。かくかくしかじか、と事情を説明。その後、時計を見て、頷き合うAチーム四名。ハイデン夫妻に見送られ、ハイデン宅を駆け出していく。（Aチームの作業テーマ曲、クレッシェンドして終わる。）

その頃、機内は束の間の静寂を取り戻していた。

スットコドッコイは、鼻歌混じりであちこち触りまくり、ジャンボ機の機械系統と親睦を深めている。

「あー、ふんふん、ここ押すところなのかあ。へえー。」

「わかります？」

「うん、大体ね。でも、ロシアの機体に比べると随分ま

だるっこしいね、安全装置はつきりついててさ。もつと思いつた設計しろっての。」

「いや、そこは思い切つてはしくないですけどね。」

「そう？ 面倒臭いじゃん。金もかかるし、機械はシンプルが一番だよ。ぶるーんと回して、すかーつと飛んで、べろーんて降りなきゃ。」

「そんな、擬音だらけで操縦されたくもないです。まあしかし、ありがとうございます、いろいろと。」

「礼には及ばないって。僕だって時間通りにロ스에着きたいもん。それより、お茶が何かくれないかな。喉渇いちゃったよ。」

「はいはい。」

何とか平常心を取り戻したキンケイドは、コーヒーを淹れにバックヤードへと立った。

その頃、寝静まる客席で、一人の男が目を覚ましていた。東南アジア系だろうか、黒髪の巻き毛に、黄褐色の肌、黒々とした眉毛が真ん中で繋がっており、体格はかなりマッチョ。

男は、むつくりと起き上がり、まだ覚醒しきらない表情で頭をボリボリと掻いた。そして、首、続いて背中も背中を掻く際、黒のセーターが捲れ上がって、下に着ていたTシャツの地球柄がチラリと見えた。男は、ふああ、とあくびをすると、ゆつくりと立ち上がった。

「どうやら眠っちゃったらしいな。」

と、男は呟いた。そして、ゆつくりと周りを見渡す。男の視界を横切っていくのは、眠りこける乗客と、縛り上げられたマザー・アース友の会の面々の姿。

「誰か、小癪な真似をしてくれた奴がいるようだな。」

この男、名前をエディ・ガウデンシオと言う。迂闊にもストコドッコイとキンケイドが見落としたこの男こそ、マザー・アース友の会きつての武闘派、別名、岩石パンチのガウデンシオであった。

「えーと、コーヒー豆は、選べないのね。フリーズドライか。」

キンケイドは、紙コップにインスタントコーヒーの粉を振り入れ、ポットから熱湯（と言っても摂氏九十度く

らい）を注いだ。砂糖とミルクの小袋とスプーンを掴んでトレイに乗せ、くると身を翻して客席へと一步踏み出したところで、何かにぶつかってよろめいた。

「兄さん、俺にもコーヒーくんねえか。」

岩石パンチのガウデンシオは、キンケイドの遙か頭上からそう言い放つと、ニヤリと笑った。

「ああ、お目覚めになったんですね、よかった……。」

心底ほっとした表情のキンケイド。だって、彼の目の前にぬぼーっと立っているマッチョマンがマザー・アース友の会の会員だとは知らないから。

「よろしければ、このコーヒー、どうぞ。」

「おう、済まねえ。」

トレイごとコーヒーを受け取り、ガウデンシオは手近な空席に腰を落ち着け、粉末ミルクと砂糖とをササーッとコーヒーに入れた。

「兄さん、ミルクと砂糖、あと二つずつ貰えねえか？」

「あ、はいはい。」

もう一度インスタントコーヒーをこさえていたキンケイドが、素直にミルクと砂糖の小袋を二つずつ持って、ガウデンシオに渡す。

岩石パンチのガウデンシオは、非常にミルクで非常に甘いコーヒーをずずずと啜って、ふはーと息をついた。そこへ、優しい微笑みのキンケイドが、すつと皿を出した。その皿の上に乗っているのは、何と、レアチーズケーキ（ただし冷凍ケーキを解凍したもの）。

「甘党の方とお見受けしました。よろしかったら召し上がって下さい。」

因みに、キンケイド氏は「チーズケーキと言ったらベイクド派」だし、ストコドッコイに至っては「ケーキなんぞ女子供の食べるものであり成人男子がケーキを食べるなど言語道断」という姿勢である。そんなわけで、この機内にはレアチーズケーキがたっぷり残っているわけです。ウオトカは底を突いたけど。

「ありがてえ。」

ガウデンシオはレアチーズケーキを受け取ると、二口でそれを平らげた。

「んー、沁みるぜ……。」

実はこの男、ケーキ好きなのであった。それも、グル

メなわけではなく、甘いものがただただ好きという、安上がりな奴。多分、鶏卵素麺も好きだろう。

「見事な食べっぷりですね！ 素晴らしい！ もっとお持ちしましょうか？」

「ぜひ頼むぜ！」

その時、ガウデンシオはとてもいい顔をしていた。

チーズケーキ二十四ピース（ホウルケーキ二つ分）をお目覚めのお客様にお出したキンケイドは、コーヒーを持って操縦室に入っていた。

「遅いよ。」

「済みません。お客さんが一人、目を覚ましたもんで。」

そう言つて、キンケイドはストコドッコイにコーヒーを差し出した。

「ああん？ 紅茶じゃないの？」

「ええ、コーヒーですが……紅茶がご希望です。」

『お茶』って言つたら紅茶に決まってるでしょ。」

「はいはい。」

「あ、ジャムは入れないでね。」

「入れませんよ、ジャムなんて。」

ブラックコーヒーを啜りつつ、片手にトレイを持って、キンケイドは操縦室を出た。

戻ってくると、ガウデンシオは既に十二ピースをクリアしていた。

「飛行機に乗って、こんなにケーキが食べるとは思わなかったぜ。」

キンケイドに激笑顔を向ける。

「よかったですね。」

につこりと笑顔で応えるキンケイド。

「おうつ、最っ高に幸せだ！」

右手にフォークを握ったまま、ガウデンシオはウォーッと叫んで両手を天に掲げた。

「感謝するぜ、地球のおっかさん！ フレー・ホー、地球のグチ公！ グッジョブ、乳牛！」

それを聞いて、キンケイドの血の気がさーと引いた。

『こいつ、マザー・アース友の会会員だ……。』

しかし、ありがたいことに、マザー・アース友の会

員は漏れなく馬鹿なのであった。その証拠に、ガウデンシオは、ここにいるキンケイドとコクビットにいる男とが「小癪な真似をしてくれた奴」だと全く気づいていない上、「小癪な真似をしてくれた奴」がいること自体、いや、「小癪な真似」が行われたこと自体を、チーズケーキ食べ放題により失念していた。

一方、キンケイドは、大して役には立たないけれども馬鹿ではないので、このマッチョマンがマザー・アース友の会会員にもかかわらず、大好物のチーズケーキを鰻腹食べさせてもらっていることによって、自分のすべきことを忘れてしまっている、ということに気がついていた。ティーバッグの紅茶を煎れながら、冷凍チョコレートケーキ十二ピースを解凍する。

トレイに紅茶と砂糖とミルク（レモンは見つからなかった）を乗せ、自分のコーヒーも乗せると、砂漠のビジネスマンはチョコレートケーキをもガウデンシオに供して、さつさとストコドッコイの元に急いだ。

「何てこったい！ チーズケーキに続いてチョコレートケーキまで食べるなあ、こりやまるで盆と正月と旧正月とクリスマスと独立記念日とハロウィンとイースターと夏休みが一緒に来たみてえじゃねえか！」

後ろでは、ガウデンシオが喜び一杯に叫んでいた。

空港のエントランスに滑り込んでくる、紺色のバン一台。他の車の間を縫ってドリフトでキュキュッと停止し、レンジャー部隊さながらに降り立ったのは、Aチームの四人。きりと前を見つめるその姿は、まるでアクション・ドラマのワンシーンのよう。

その後ろに続くのは、まだ事態を把握しきっていないヴォルフとスタングの二人。車中で一応、考え得る事態についてはハンニバルから説明を受けたものの、「親分なら大丈夫」という考えに染まりきった二人の頭には、ハイジャックの重大さが今イチ理解できていないのであった。

仕事モードの四人と、オロオロ系二人の計六人は、ずんずんと空港に入っていく。

「どうする、ハンニバル。」

「まずは到着ロビーだな。何かアナウンスがあるかもしれん。」

れん。それから管制塔。手分けして行くぞ。」

「おう。」

「わかった。」

「了解。」

ハンニバルの言葉に、瞬時に役割分担を把握し、行動を起こすAチーム。

「俺たちやどうすりゃいいんだ？」

と、把握できないヴォルフ。

「お前たちは、俺と一緒にロビーに來い。」

「わ、わかった。」

「フェイス、モンキー、管制塔に潜入できたら連絡しろ。」

「できたらね。」

一同は、二手に分かれて行動を開始した。

【つづく】